

# 中江丑吉の日中関係論

鄧 偉 権

(訳：永木敦子)

## はじめに

中国では中江丑吉（1889-1942）についての研究はまだ少なく、筆者が10年前に書いた「中江丑吉の反戦論とその反戦行動」<sup>[1]</sup>以外、ほぼ中江の古代中国に関する研究の紹介<sup>[2]</sup>にとどまっている。彼の日中関係論についての研究論文はまだない。アメリカの学者、フォーゲルの『中江丑吉と中国』<sup>[3]</sup>は、中江研究の最高峰と見なされているが、中江の日中関係論について、総括的な論述はない。日本において50年以上中江研究を続けている阪谷芳直氏も、「中江丑吉の中国認識」<sup>[4]</sup>というテーマで報告を依頼されたとき、やはり資料が少ないと感じたと述べている。しかし実際は、中江の古代中国に関する研究著作、中江が『順天時報』に発表した文章に対して他の人が書いた評価、そして中江の戦争の経過及び戦後の情勢に対する予測を拠り所にすれば、中江の日中関係論をほぼ総括的にまとめられると思う。

## 一 『中国古代政治思想』に見られる中国観

『中国古代政治思想』は、中江の古代中国研究の論文集で、中江逝去後の1950年に岩波書店から出版された。古代中国に関する論述であるが、その行間から現代中国への関心を読み取ることが出来る。論文作成当時の1919年から1943年までの中国に対する見方も反映されている。

中江は1914年、満鉄の社員として中国の地を踏み、その年の年末、袁世凱の憲法顧問である有賀長雄の秘書として大連から北京に赴いた。当時、欧州は戦争の最中で、日本はその機に乗じて、中国山東省におけるドイツ権益を奪った。中国の主権を著しく損ない、さらに「21か条の要求」を提示したため、日中関係は極度に悪化していた。中江が中国に来るのを手助けた曹汝霖は対日交渉の主役であった。中江は当時の日中間の政治問題には一切関わらないという態度をとり、曹個人のコンサルタントのみ引き受けていた<sup>[5]</sup>。

中江の第一篇目の論文「中国古代政治思想史」（1925年）の「自序」で、本書<sup>[6]</sup>を書いた動機をつぎのように述べている。「大正三年曹汝霖、章宗祥の両氏に依って中国に来て以来、只訳も判らず無頼なる放蕩生活に其日を送っていた鄙人が本書の起稿に志したのは、両氏共に有名なる五四運動として内外の人たちに知られて居る民衆運動の犠牲に立たねばならなくなつてからであった」<sup>[7]</sup>。「民衆運動の犠牲に立たねばならなくなつて」という言葉に当時の

中国情勢に対する中江の以下のような判断が含まれているといえるだろう。それは日本が「21か条の要求」を提示したことにより、日中関係は急激に悪化したので、日中交渉で親日派と見られていた曹汝霖は、必ず民衆運動における攻撃の対象となるだろう、ということである。中江が無頼なる放蕩生活と訣別し、学問研究をしようと志を立てた理由については、満田郁夫が非常に適切にまとめている。つまり結婚生活によってもたらされた安定感、イエリネクの『一般国家学』から受けた感銘、「七草の日に学に志した」こと、そして五四運動の衝撃である<sup>(8)</sup>。しかし、補足しなければならないことは、以上の数点は中江がなぜ「学に志した」のかを説明しているだけで、なぜ古代政治思想を生涯の研究テーマとしたかについての説明になっていないということである。

以下の、曹汝霖の回想録の中に、この問題の解答の手がかりを見いだすことができる。

滙業といえば、日本の友人中江丑吉君を思い出す。彼は帝大卒業後、民国3年に北京の私のもとを訪ねてきた。そして我が家を借りて、中国古代政治史の研究がしたいといった。私は官舎に住んでいたため、日本人と一緒に住むのは具合が悪い。近所に七部屋ある家があり最適だと思われたので、私が借りて彼に提供した。私は月給500円で彼に日本と通信させようとした。2ヶ月後、彼は通信に興味はないといい、200円は辞退して、生活費300円だけ受け取った。彼は独身で、多くの中国書籍を買い、熱心に研究していた。そして私に学者の王書衡、王袞府諸君を紹介させ、よく教を請うていた。我が家に近かったため、よくお互いに行き来していた。<sup>(9)</sup>

この曹の言葉から、「大正3年」(1914年)には、中江はすでに自身の研究テーマを決めていたことがわかる。また、満田が指摘した4点のうち、イエリネクの影響が最も決定的であった。これはフォーゲル氏が中江の第一篇の論文を分析した際、以下の様に指摘したことからも分かる。「中江の、ここでの「国家」と「国家生活」に対する主たる関心は、Staat(国家)というものを凝視させられたかれのドイツ政治学の耽読の偉大な影響を反映している。「国家論」(Staatslehre)、「国家法」(Staatsrechtlehre)と「政治学」(Staatswissenschaft)は、十九世紀後期のドイツ政治思想－イエリネクはその一部であった－に優位を占め、圧倒的な影響力を中江ばかりでなく全日本の学界に揮った。そして、このような国家に関する強調は、直接イエリネクに帰せられようと、或いはより大きな知的「時代精神」(Zeitgeist)に帰せられようと、いずれにせよ、中江の生涯と著作を通じて存続したのであった」<sup>(10)</sup>、と。同様に伊藤武雄の回想録からもこの点を証明することができよう<sup>(11)</sup>。

以上から、中江は中国に来た当初、あるいは中国に来る前から、すでに中国古代政治思想を研究しようと決めていたことがわかる。中華帝国がなぜ近代になって衰えたのかという問題が、彼を研究生活へと促したと思われる。それは彼がのちに書いた関連する論文からも証明できる。その論文の中で中江は、中国は古来より戦争には長けていなかったと考えて、以下のように書いている。

ただ匈奴より来襲を受る迄は車戦と云う如き原始的なる方法を墨守し、武器に於いて

も、精銳見る可きものなかりし事より推すと、有夏族は古來戦争には不得意なりし民族である。<sup>12)</sup>

また、中国古代の民意は欧州式の民意とも異なることをはっきりと認識することは現代中国にとっても重要であると考え、次のように述べている。

若し民意をかくの如く被支配者階級の意志と云ふ様に解釋し、然もこれが王權隆替の原因を爲す天命の表示とするなら、之を直ちに歐洲流に翻譯し、中國政治思想の特徴の一つは民主的傾向であると結論するは、一見正當であるのみならず、甚だ時流に投じたやり方である。殊に現代中國が今後矢張り政治的騷亂は繼續さるゝとするも、民主的共和國と云ふ國體上の問題だけは動搖することがないと見る時には、近世デモクラシーの精神を中國民族固有の傳統的産物と爲すは、政策的見地より云へば決して咎む可きでない譯である。然し乍ら鄙人……此間に本質的區別あるを確信するから、特に所謂民意と限定した所以である。<sup>13)</sup>

そして最も重要なのは、「かくの如く中國の政治思想上には人民主權の觀念を缺くから、周末の政治學説が多様多様の發達を爲したに拘はらず、獨り國體説のみは甚だ單一であり、モナーキー以外にアリストクラシーもなければ、デモクラシーも認められぬ所以である」<sup>14)</sup>と記した点である。ただし中江は秦朝以前の中國の國家形態は「早期國家」と認識し、「嚴格に云ふなら、周代と雖も、此所で云ふ人的要素、即ち團體所屬の標準を血屬的關係—實際及び擬似上の一にのみ求むる見方を脱却し、全然土地的要素を主としたる屬地的國家(Territorialer Staat)と爲りし譯ではない。此意味の國家の成立は、周の滅亡後秦の武力統一によつて纒めて完成されたのだから、周禮の如き法典中にすら、國なる意義には、其原始的意義たる國都、即ち同族團體の居住地を指示せる例が多くある」<sup>15)</sup>と述べている。また、「周代より宋朝に至る迄、殆んど絶え間なく彼等の脅威を蒙り、遂に元、清によつて征服され、其結果今日の中國人の有する民族的觀念には、動もすれば畸形的たり、神經質的なる、不健全なる排他的分子を潜在せしむるに至つたのである」<sup>16)</sup>とし、遊牧民族の侵入も現代中国に輕視できない影響をあたえたと指摘している。

中江の現代中国への関心は、第一篇目の論文では、ときに偶然あらわれるだけであつたが、「中国の封建制度に就いて」(1930年12月)では「中國が日本に先立つて資本主義社會との接觸を得たに拘らず、何故に今日迄中國に近代國家が産出されないか」<sup>17)</sup>という現實問題にはっきり着目した。中江は、問題の鍵は、中国には欧州や日本のような封建制度が存在しなかつたことにあると考えた。秦以來の中国社会はマルクスがいう「アジア式社会」で、この「社會の經濟的根本要素の構造は政治的暴風雨とは全く關係がないからだ」<sup>18)</sup>とし、資本主義の侵入により、ようやくこのような狀況が變化するに至つたと指摘した。

中江はその他の論文の中でも現代中国について論述している。紙幅が限られているので一つ一つ挙げないが、中江は当時の中国には總體的に失望しており、「現代中國の様に、社會そのものが全く土臺を失つてるところでは、凡ての方面に於けると同じく、學問界に於いて

も亦優秀なものが求められないのは、少しも不思議はない譯である』<sup>99</sup>と述べている。それでは中江は、なお近代国家建設中で立ち遅れていた中国の現実に直面して、どのように日中関係を構想したのだろうか。中江は『順天時報』に多くの社説を書いたが、署名がないため、現在ではその構想の全貌を知ることは難しい。その新聞の主筆を務めた金崎賢の回想文中に中江とその新聞との関係が以下のように述べられている。「所が、私が旅行中などは社説を中江氏に書いて頂いたこともあり、私がゐる時でも人手の足りない場合には週に一回ばかり書いて頂いたことがあつた。素より氏の見識は高邁であり、支那現代の实情にも通じてをり、文章もうまいのだが、社説として表面に出し得ない文句が時々出て来る。私共の新聞の立場として、最も多く国際関係、日華外交に顧慮しなければならぬ点が多いので、氏の稿を良いとは思ひながらもそのまゝ出されぬ事がある。その時は私は已むを得ず添削を加えた。或時には三分の一ばかりしか氏の文を生かさず、他は私が書き加へたりした。中江氏の署名なら原文で結構なのだが、社説に就ては私が責任を負ふてゐるので、責任上私の気持ちの通りに書き直さねば私の気がすまない。普通に知られてゐる中江氏の性格として、斯様な場合に大に憤慨する筈であるが（自信が強く、自説を強調して苟くも譲らぬ性格だったと考へられてゐた）、氏は案外に極めて淡々たるものだつた」<sup>100</sup>、と。金崎の文章から、中江がその新聞に書いた社説の性質について、以下のような結論を得ることができるだろう。第一に、これらの社説は、時には金崎が大幅に修正を加えたため、中江の思想を直接分析する材料にすることはできないということである。第二に、中江はこれらの社説をそれほど気にしておらず、修正についても泰然としていた。そしてこれらを書いた目的は、友人の頼みであり、生活費の一部を賄うためでもあったということである。第三に、中江は社説を書くために資料を準備していたということである<sup>101</sup>。これは中江が日中関係を含めた国際情勢に関心を持ち続けていたことを示している。しかし中江の観点と政府側の観点は大きく異なっていた。この新聞は日本外務省の機関紙だった。日中関係については事実とは異なることがあった。中江の論説が日本政府側の要求と合わなかったということは、日中関係に関する中江の観念の独自性を示しているといえよう。

## 二 「日中間の戦争は一時的な状態に過ぎない」

1931年9月18日、日本軍は中国軍が鉄道を爆破したとの名目で侵攻を開始した。日中間の15年にわたる戦争の幕が開いたとき、中江はこの戦争の行方について正確に見通した。

### 1 「満州事変（九一八事変）は世界戦争の前兆である」

『年譜』の記載によると、中江は「木村らに、これを世界戦争の前兆として説明した」<sup>102</sup>とある。以下に見られように、中江は事変後間もなく自ら奉天（現在の瀋陽）を訪れている。曹汝霖の回想には、この時の中江に関する以下のような記載がある。

中江丑吉君も心配して、北京から出てきてくれ、「新聞を見ると、張学良は、先生が会谈で述べた主張に対して、非常に不満の意を洩らしているようだが、先生はどんな意見を述べたのか」と尋ねるので、私は、地方事件として交渉、速決が肝要だと主張した旨答えると、中江君は「最近北京の新聞は、また親日派の排撃を高調、宋哲元まで『絶対に親日派の言うことを聴いてはならぬ』と、暗に先生を目指した演説をしたから、気をつけたがよい」と言い、彼はまた「関東軍には中学の同級生もおり、自分が何ら政治色彩のないことを知っているから、奉天に行って、一体彼らは、結局どうしようと思っているのか、聞いてみたい」と言って、奉天に行った。数日すると帰ってくるなり、「いや驚いた。彼らは、満州を独立国にするのだ。もし政府が邪魔するなら、彼らは自由行動を取って、日本の国籍を棄てることも惜しまない。英国が米新大陸でとったと同じ方法でゆく、と言っており、彼らは、どんなことでも考えた通りに敢行するのだから」と言うので、私は、本庄司令官はどうだと聞くと、「本庄司令官は本来穏健派だといっても、あの氣勢を抑え得るかは疑問だ。今はまだ政府がこれを抑止しているけれども、早く解決しないと、遠からず收拾できなくなるに違いない。彼らは満州を独立国にしてしまったら、さらに華北も特殊化する考えである」と言うので、「特殊化」とはどういう方法だと尋ねると、彼は「独立の前奏」だと言った。私は中江君の話を聞いて、これは大変なことだと思った。<sup>23</sup>

中江のこの行動を彼自身の決定と解釈するにしても、あるいはコミンテルンの派遣と解釈するにしても、いずれにせよ中江は事変が日中関係に重大な影響を及ぼすと認識していた、と説明することができよう。

## 2 「盧溝橋事件は日中を全面戦争に導く」

盧溝橋事件が起きた時、中江は日本の九州で夏を過ごしていた。ラジオでこのニュースを聞くとすぐに天津に戻った<sup>24</sup>。曹に事件の歴史的意義を説明し、実業以外の事に従事しないよう忠告した<sup>25</sup>。長與善郎は『一夢想家の告白』の中で、中江を、盧溝橋事件がこれまでの日中間の衝突とは性質が異なることを見抜いた「炯眼の士」とであると中江をたたえている<sup>26</sup>。中江はまた、今回の事件は国際紛争を引き起こすだろうと考えていた。その年の年末に訪ねてきた守屋典郎には「この戦争は日英戦争のプロローグだよ」<sup>27</sup>と言っている。

## 3 「日本はアメリカに敗れる前に中国に敗れる」

加藤惟孝は、「『中江丑吉書簡集』は、日本がアメリカよりも先に中国に完全に負けたのだということを、物価や政策や個人生活の細かい変化から克明に描き出している」と指摘している。この言葉は非常に的確である。中江は鈴江言一に宛てた書簡の中で、食糧が欠乏していること、寒い日でも焜炉を使わないこと、なつめの葉をお茶の代わりにしていること、そして物価の高騰、風習の変化などにひんばんに言及している<sup>28</sup>。中江が記した北京は、中国

軍民の長期にわたる抵抗下での日本の「ジリ貧」の縮図であった。

そのほかに中江は、日本側が進めようとした「華北明朗時代」が実は華北の中央化時代であること、ソ連・ドイツの戦場が第二次世界大戦の主戦場であること、太平洋戦争は不可避であること、スターリングラード攻防戦が第二次世界大戦の転換点であることなどを正確に予測していた。そして日本の敗戦を予測すると同時に、中江は自分なりの反戦行動をとり、日本政府側とのいかなる協力も断固として拒絶した<sup>29</sup>。日中は戦争状態にあったが、中江は日中関係の未来に依然として確信を抱き、「然し乍ら四億万と一億に近き人間が纔に水を隔つるのみで生存せる事實は、如何なる力を以てするも抹殺し得可からざる事實也、目前一時の状勢には勿論悲観するも大局上は毫も悲観の要なし、一日も早く大道に復行する日を熱望するのみに候」<sup>30</sup>と述べている。中江は戦争状態にある限り、日中親善は不可能だと考えた。彼は日本政府が唱えた「大東亜共栄圏」に反対しただけでなく、「東亜共同体論」にも反対し、時代錯誤であると断言した。

### 三 戦後の日中関係

戦争の経過についての中江の予測は、ファシズム国家の失敗という結末だけでなく、戦後の構想までも含んでいた。以下中江の、戦後の世界、日本と中国についての予測をそれぞれ論述した上で、中江の日中関係論についてまとめたい。

#### 1 戦後の世界についての予測

1941年8月15日、ちょうど日本敗戦の4年前、中江は、まもなく帰国する阪谷芳直に枢軸国の失敗を予言し次のように述べた。「だが、ドイツも日本もけっして全く無だというのではない。ともに『アンテイ・テーゼ』であり、『ニヒト・ザイン』としての役割を持っているんだ。だから、戦後の新しい秩序も従来のデモクラシイそのままではありえない。必ずアウフヘーベンされた新しいデモクラシイが現れるはずだ」<sup>31</sup>と述べている。中江の言った変革が一体何を指すのか、鈴木正の以下の分析にそれを考える手がかりを見出すことができる。「それはおそらく、さきの予想を軸に、リベラル・デモクラシーのブルジョア的性格と制限を払拭し、本当に働く民衆の社会と民主主義の普遍的实现という、現代的課題と真正面からとりくんだものになったのではあるまいか。」<sup>32</sup>

戦後の新しい秩序は政治面だけでなく、経済面にも表れていた。資本主義自体のロジックに合わないため、戦時中各国が実施した経済ブロック化政策は終了するだろうとし、「広域圏だの、アウトルキイ（自給自足圏）だのといった考えは、資本主義経済の指向するところと完全に逆行しているな。資本主義というものは、その本質上、世界的な規模で経済交流する方向をとるもので、世界がいくつかの孤立した経済圏に分かれるなどは、資本主義の発展にとり阻害要因でしかない。資本主義の法則が自己を貫徹していくことは明らかであり、こ

の世界の戦争状態が終れば、急速に、そしてより緊密な仕方で、世界は経済的に結びつかざるを得ない。こんなことは自明の理だ<sup>93</sup>と述べた。そして中江は鈴江に宛てた書簡の中で、世界経済が再登場することを確信し、それは戦前よりさらに組織化されていくと記していた<sup>94</sup>。

## 2 戦後日本についての予言

敗戦は日本にとってどんな意味を持つのか。中江は、これはまず近代国家を構成する重要な要素である領土の変化を意味すると認識した。「日本も近く大戦争を惹起し、そして結局は満州はおろか、台湾、朝鮮までもモギ取られる日が必ず来る。」<sup>95</sup>と記している。1945年のポツダム宣言での日本の領土の規定はまさに中江の予言と符合する。これは日中関係が日清戦争以前の状態に戻ることを、より正確に言えば、日清修好条規調印時の対等な関係に戻ることを意味していた。

敗戦はまた日本の国家改造をも意味していた。戦時中、日本軍は「大日本皇軍」と称した。その兵士たちはしばしば「天皇陛下万歳」と叫んで突撃し、戦争の残酷さと残忍さを増加させていった。これは同盟国側に強い印象を残した。当時、中国連合準備銀行顧問室に勤めていた小原正弘は、天皇は憲法の枠を超えた発言、行動をしており、軍隊の最高権威であると認識した。このような天皇制は廃止したほうがよいという強い望みを中江に示した。しかし中江は小原の考えに賛同せず、「敗戦によって日本も変革されるだろう。天皇も軽く頭の上ののっけるシャッポ（帽子）のごとくなるだろう、そうすべきなんだ。」<sup>96</sup>と述べている。戦後の「日本国憲法」で天皇を「象徴天皇制」と規定したことは、中江の予言を実証しているだろう。中江は、日本のファシズム化は軍部主導であり、戦後軍部の責任は厳しく追及され、「民族国家の国民という形で人間が存在している歴史の発達程度では」<sup>97</sup>国民全体も苦難に陥ることは避けられない、と認識した。

経済建設の重要性も大幅に高まっていた。安田薫の回想によれば、1939年早春、中江はその時興亜院華北連絡部にいた大来佐武郎に、「この日中戦争は世界戦争に発展し、日本は敗北する。敗北した日本は再建しなければならぬ。君はそのことを考え、北京で通信省の技師としてつまらない仕事をしないで、日本に帰って日本敗戦後のことを考える仕事をしたらどうか。これが君の重要な仕事と考える」<sup>98</sup>と述べた。大来は中江の提言を受けて、日本経済の再建と発展に重要な役割を果たした<sup>99</sup>。彼が読売新聞社の記者と日本経済復興の問題について対談した際、自身の選択の際に中江があたえた影響について触れている<sup>100</sup>。

## 3 戦後中国についての予言

中江は加藤惟孝に「二十世紀の後半に中国は世界史の中心になるだろう」と言ったことがある。加藤は、これは国民党を指して言っており、蒋介石に対する評価とつながっていて、中共がこれほど早く権力を掌握することは予想できなかっただろう、と考えた<sup>101</sup>。阪谷芳直

は中江の読書ノートから次のような中共についての彼の評価を見つけた。「中国におけるK・Pは丁度清朝の耶蘇教と似ている。K・Pがその主義を実行せんとする限りにおいては、中国の政府と相容れない。しかし耶蘇教徒が、殊にJesuitsがその該博の知識を実際目的のために中国政府に貢献した範囲内においては、政府は喜んでこれを利用した。これと同じくK・Pが中国の国民運動の急先鋒として対日抗戦に奮闘することを任務とする限りにおいては、中国政府は喜んで此を抱容する。耶蘇教は中国において驚くべき信徒数を獲得しているが、その教義ならびに信仰がどの程度にクリスチャンとして他の非クリスチャンたるかれ等の同胞とかれ等を区別しているかは疑問である。耶蘇教の成功は、かかる信仰の方面ではなしに教育、技術、医療、一般の新文化を中国に提供し、これによって耶蘇教を宗教としてよりも社会的施設として人心を吸収した点にある」<sup>42</sup>、と。この阪谷の指摘は、加藤の分析を実証しているように思われる。実際、どの党が権力を握るかということは重要なことではなく、中江が真に言いたかったことは、中国が近代的な国家を作り上げたなら、世界におけるその地位は軽視することはできないだろう、ということであった。確かに蒋介石に対する中江の評価は比較的高く、例えば蒋介石が指導した新生活運動は革命的变化<sup>43</sup>をもたらしたとして、「世界史の動きを左右する力」を基準とした場合、蒋介石は当時の「世界の五大指導者」の一人であると位置付けている<sup>44</sup>。これらの記録から判断すると、中国共産党も中国の近代国家建設に一定の役割を果たすが、国民党が妥協できる範囲を超えた場合、双方は必ず武力衝突すると、中江は考えていただろう。しかし蒋介石が必ず中国を統一すると予測した訳ではない。国共双方が近代国家建設のために努力しており、それは黄仁宇が言った、「国民党が高層構造を作り、共産党が低層構造を作った」ということも同じ意味だったのであろう。

中江の戦後の予測の中からも、彼の日中関係論を見いだすことができる。それは、日中関係は対等な状態にまで回復し、交流の内容は経済が中心となる。中国の実力は上昇し、世界で重要な地位を占めることになる。そして日本の地位は相対的に下降する、ということであった。

## おわりに

以上述べたことをまとめれば、中江の現代中国に対する認識は、彼の中国古典研究と中国の現状観察に基づくものであった。そして彼は戦時中の日中関係に絶望していたわけではなかった。なぜなら彼は「歴史は人類の歴史」<sup>45</sup>であり、「恒久平和が古今を通じ種族を問はず、人類生活の自然なる渴望」<sup>46</sup>であると考えていた。「戦争という異常事態が非常に長期間にわたって継続するということは、絶対に不可能」<sup>47</sup>で、戦争はただ「一つの無限不断の運動の一リング」<sup>48</sup>にすぎず、「歴史が戦争をもって常態とするなんていう考えは、全くナンセンスだ」<sup>49</sup>と認識していたからである。戦後の日中関係について、中江はさらに自信を持って判断した。中江がそれほど高い見識を持ちえた理由は、ドイツの古典哲学の名著[カントの『純

粹理論批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』の三批判書、ヘーゲルの『精神現象学』とマルクスの『資本論』を繰り返し精読したことによるだろう。英語で人性と人類という二つの意味があるHumanityと、ヘーゲルの『精神現象学』に出てくるといふドイツ語の「倫理」を指すSittlichkeitは、中江が人と人との関係及び国と国との関係を分析する際の基本理念である。この理念は中国経学の王道主義と通じる。そして父の兆民の影響もまた無視できないだろう。

## 注

- (1) 拙稿「試析中江丑吉的反戦論及反戦行動」(古厩忠夫教授還暦記念論文集編輯委員会編『中日関係多維透視』香港社会科学出版社, 2002年, 所収)。また、拙稿「中江丑吉是否共產国際代表考析」(北京大学日本研究中心編『日本学』第16輯, 世界知識出版社, 2011年, 所収) 参照。
- (2) 劉起紓は『日本の尚書学與文献』(商務院書館, 1997年)で中江の尚書研究について紹介している(217, 234-235ページ)。李慶は『日本漢学史』(第2部:成熟和迷途(1919-1945), 上海人民出版社, 2010年版)で、中江と橋朴とについて一節を設けて、中江の古代研究の成果を紹介した。さらに中江の生涯と「彼がいた時代の日中関係と国際関係の見解について」も簡単に紹介している。これは中国においては比較的まれであり(嚴紹盪の『日本中国学史稿』では中江について言及されていない)、著者の優れた見解を示している。ただ誤りも多いため、筆者は後日論文で問題点を明らかにする予定である。
- (3) Josua A. Fogel. *Nakaeushikichi in China* (New York, 1989). この書籍の中国語訳本は、鄧偉権・石井知章訳『中江丑吉在中国』(商務院書館, 2011年)である。
- (4) 阪谷芳直の報告は、後に社団法人中国研究所『中国研究月報』1997年11月号に掲載された。報告後の討論は、阪谷芳直編輯『中江会通信』(合本, 阪谷芳直, 1999年)に掲載された。
- (5) 阪谷芳直編『中江丑吉年譜』(最新版, 阪谷芳直, 1994年) 8頁。
- (6) 本論文のもともとの題名は「支那古代政治思想史」で、中江が執筆を準備していた同名の著作の第一巻である。そのため「本書」と記した。戦後の出版時、現在の題名である「中国古代政治思想史」に改められ、『中国古代政治思想』の書名もこの論文からつけられた。
- (7) 中江丑吉『中国古代政治思想史』「自序」、『中国古代政治思想』(岩波書店, 1975年) 2頁。
- (8) 満田郁夫「中江丑吉について」阪谷芳直編『中江丑吉という人』(大和書房, 1979年) 53-62頁。
- (9) 曹汝林『一生之回憶』(台湾伝記文学出版社, 1980年) 308頁。
- (10) ジョシュア・A. フォーゲル著, 阪谷芳直直訳『中江丑吉と中国—ヒューマニストの生と学問』(岩波書店, 1992年) 63-64頁。
- (11) 伊藤武雄『満鉄に生きて』(勁草書房, 1964年) 80頁。

- (12) 中江丑吉「中国古代政治思想史」(『中国古代政治思想』岩波書店, 1975年) 90頁。
- (13) 同上, 184頁。
- (14) 同上, 190頁。
- (15) 同上, 29頁。
- (16) 同上, 60頁。
- (17) 同上, 235頁。
- (18) 同上, 281頁。訳文は中央編訳局譯『資本論』第一卷(人民出版社, 2004年) 415頁。
- (19) 中江丑吉「書廿九篇に關する私見に就いて(一)」(前掲『中国古代政治思想』) 492頁。
- (20) 金崎賢「云ひ知れぬ親しさ—中江丑吉氏と私—」(前掲, 『中江丑吉という人』) 100頁。
- (21) 京都大学人文科学研究所所蔵の中江文庫にある42冊の中江の読書ノートのうち、かなりの部分が『順天時報』の社説を書くために準備した資料であった。たとえば、M1中の武漢革命時代の国共兩党の闘争に関する記録、M6中の帝国主義と植民地問題に関する記録、M16中の社会問題に関する記録、N2中の中国の農民組織工人組織及びその運動に関する記録、N7中の英国の失業問題に関する記録、そしてN14中の中国軍閥政争關係についての記録などである。
- (22) 阪谷芳直編『中江丑吉年譜』(最新版), 阪谷芳直, 1994年, 15頁。
- (23) 曹汝霖『一生之回憶』(台湾伝記文学出版社, 1980年) 218頁。日本語訳については、曹汝霖著, 曹汝霖回想録刊行会編訳『一生之回憶』(鹿島研究所出版会, 1967年) 200頁を参照。
- (24) 1997年5月14日に岡本清氣が阪谷芳直に宛てた書簡(阪谷芳直編『中江会通信』(合本), 阪谷芳直, 1999年, 57頁)。また前掲『年譜』20頁参照。
- (25) 前掲, 曹汝霖『一生之回憶』251-252頁。
- (26) 前掲, 『中江丑吉の人間像』(風媒社, 1970年) 72頁、より重引。
- (27) 守屋典郎「日本帝国主義の史的分析」(同前, 『中江丑吉という人』) 212頁、より重引。
- (28) 鈴江言一ほか編『中江丑吉書簡集』(みすず書房, 1984年) 88, 121, 136-137, 147, 150, 155, 166, 168, 171, 185, 190-191, 196-197頁。
- (29) 前掲, 拙稿「試析中江丑吉的反戦論及反戦行動」参照。
- (30) 1938年7月13日、今井新太郎に宛てた書簡(鈴江言一[ほか]編『中江丑吉書簡集』みすず書房, 1984年) 348頁。
- (31) 阪谷芳直「老北京の面影 1 世界史進展の法則」(阪谷芳直, 鈴木正編『中江丑吉の人間像』風媒社, 1970年) 219-220頁。
- (32) 鈴木正「個のなかの普遍者—中江丑吉論」(同前, 『中江丑吉の人間像』) 373頁。
- (33) 阪谷芳直「老北京の面影 4 追憶片々」(同前, 『中江丑吉の人間像』) 255頁。
- (34) 1941年4月19日に鈴江言一に宛てた書簡(前掲, 『中江丑吉書簡集』) 219頁。
- (35) 阪谷芳直「老北京の面影 1 世界史進展の法則」(前掲, 『中江丑吉の人間像』) 219頁。

- (36) 小原正弘が2009年2月15日に鄧偉権に宛てた手紙。小原は中江に会ったことがある人のうち唯一健在の人である。当時横浜正金銀行北京支店に勤めており、中国連合準備銀行顧問室に臨時に移動していた。小原は『中江丑吉書簡集』の220, 236, 238, 250, 253, 255, 319-320, 325, 327, 329-331, 386, 404, 409等の頁に記載されている。晩年中江が比較的親しく付き合った人である。
- (37) 加藤惟孝「或る個性の記録 1 戦時の中江丑吉」(前掲, 『中江丑吉の人間像』) 82頁。
- (38) 安田薫が1997年7月13日に阪谷芳直に宛てた手紙(阪谷芳直編輯『中江会通信』(合本), 阪谷芳直, 1999年) 99頁。
- (39) 泰薩・莫里斯-鈴木(Tessa Morris-Suzuki)著, 厲江訳『日本経済思想史=A History of Japanese Economic Thought』(商務院書館, 2000年) 172-177頁。
- (40) 読売新聞社『昭和史の天皇』において引用されている、安田薫が1997年7月13日に阪谷芳直に宛てた書簡より引用。阪谷芳直編輯『中江会通信』(合本, 1999年) 100頁。
- (41) 加藤惟孝が1971年11月4日に阪谷芳直に宛てた手紙。加藤惟孝著, 阪谷芳直編『北京の中江丑吉』(勁草書房, 1984年) 184-185頁。
- (42) 阪谷芳直編輯『中江会通信』(合本), 阪谷芳直, 1999年, 303頁。
- (43) 阪谷芳直「老北京の面影 3 炎天行」(前掲, 『中江丑吉の人間像』) 249頁。
- (44) 阪谷芳直「老北京の面影 4 追憶片々」(同前, 『中江丑吉の人間像』) 255-256頁。
- (45) 前掲, 『中江丑吉書簡集』 384頁。
- (46) 中江丑吉「中国古代政治思想史」(前掲, 『中国古代政治思想』) 191頁。
- (47) 阪谷芳直「老北京の面影 4 追憶片々」(前掲, 『中江丑吉の人間像』) 253頁。
- (48) 鈴木正「個のなかの普遍者—中江丑吉論 六 現代批判」(同前, 『中江丑吉の人間像』) 372頁。
- (49) 阪谷芳直「老北京の面影 4 追憶片々」(同前, 『中江丑吉の人間像』) 254頁。